
山形県公共施設等 色彩デザインマニュアル

平成12年1月

山形県

山形県公共施設等色彩デザインマニュアル目次

序編：「山形県公共施設等色彩デザインマニュアル」のねらい	1
(1)位置づけ	1
(2)作成目的	1
(3)利用想定	1
I編：山形県の色彩の現状	2
1. 自然豊かな県土の色彩	2
2. 都市環境の中の色彩	4
3. 地域・地区に特徴的な色彩	4
II編：公共施設色彩設計の基本原則	6
原則1 施設設計の一環として色彩を考える	7
原則2 素材の特性を踏まえて色彩を考える	9
(1)着色せずに素材色を活かす	9
(2)素材の保護や表情を与えるために着色を行う	12
原則3 周辺環境と施設の関係性から色彩を考える	14
(1)施設の規模、基本形態、出現形態と周辺環境との関係を考える	14
(2)周辺環境と施設の関係について考える	15
III編：公共施設色彩設計の考え方	22
1. 公共施設の類型化	22
(1)類型化の観点	22
(2)施設の類型	25
2. 類型毎の色彩設計の流れ	26
3. 類型毎の色彩設計の考え方	27
類型Ⅰ 点的に（群として）現われる、素材色を活かすべき施設	27
(1)該当施設 トンネル・シェッド／ダム	27
(2)色彩設計の考え方	27
(3)個別施設の色彩設計の留意点	28
類型Ⅱ 線的・帯状に現われる、素材色を活かすべき施設	30
(1)該当施設 擁壁／河川護岸／海岸護岸・突堤・防波堤	30
(2)色彩設計の考え方	30
(3)個別施設の色彩設計の留意点	31
類型Ⅲ 点的に（群として）現われる、スチールを用いる施設	33
(1)該当施設 標識柱・信号柱・照明柱	33
(2)色彩設計の考え方	33
(3)個別施設の色彩設計の留意点	34

類型Ⅳ 線的・帯状に現われる、スチールを用いる施設	36
(1) 該当施設	
車両用防護柵／落石防止柵・ケーブルネット／一般のフェンス類／雪払い柵	36
(2) 色彩設計の考え方	36
(3) 個別施設の色彩設計の留意点	37
類型Ⅴ 点的に（群として）現れる、多くの素材を用いる施設	42
(1) 該当施設 路上施設／橋梁・高架橋／水門・樋門／公共建築物	42
(2) 色彩設計の考え方	42
(3) 個別施設の色彩設計の留意点	43
類型Ⅵ 面的に広がりのある施設	48
(1) 該当施設 大規模ダム周辺整備／大規模な面的整備	48
(2) 色彩設計の考え方	48
Ⅳ編：ケーススタディ	49
1. 山形駅西口新都心ビル	50
(1) 施設のあるべき姿・コンセプトについての検討	50
(2) 規模・形態・素材の検討	50
(3) 色彩設計の方向性・範囲の検討	51
(4) 配色・色彩選択	51
2. 健康の森公園（仮称）関連施設	53
Ⅰ. 健康の森公園（仮称）歩道橋	54
(1) 施設のあるべき姿・コンセプトについての検討	54
(2) 規模・形態・素材の検討	55
(3) 色彩設計の方向性・範囲の検討	55
(4) 配色・色彩選択	56
Ⅱ. 山形県立中央病院	57
(1) 施設のあるべき姿・コンセプトについての検討	57
(2) 規模・形態・素材の検討	57
(3) 色彩設計の方向性・範囲の検討	58
(4) 配色・色彩選択	58
(5) 判断	59
参考資料	
1. 色彩の基本	1
2. 個別施設の色彩選定の目安	12
3. 「色彩デザインマニュアル」先進事例の調査・研究	19

序編：「山形県公共施設等色彩デザインマニュアル」のねらい

(1) 位置づけ

山形県においては、全県的景観形成のマスタープランである「山形県県土景観ガイドプラン」に記された景観形成の目標像の実現に向け、公共事業サイドの手引きとして「山形県公共事業等景観形成指針」を策定し、景観形成事業を推進している。

本色彩マニュアルは、「山形県公共事業等景観形成指針」において示された施設設計の基本的事項を、色彩設計の面で補完する関係にあるものとして位置づけ、策定したものである。

景観形成の観点から見れば、あくまでも色彩は景観の一要素であり、施設設計のプロセスの一部として色彩設計も考えるべきである。この考え方に基けば、「山形県公共事業等景観形成指針」内容を基本として施設の形態や規模等の検討を行い、それらを踏まえて色彩設計を行うというのが、本来的な施設設計の流れであるといえる。

県の公共事業が市町村や民間事業者、県民が行う行為のモデルとなり、先導的な役割を果たしていくという山形県の景観形成の基本的スタンスに立つならば、対象とする施設の形態、大きさ、素材を検討する施設設計の一部として、色彩のあり方が示されるべきである。こうした考え方に基き、本色彩マニュアルにおいては、具体の色彩を定めるのではなく、施設設計の一環としての色彩設計の考え方を示している。考え方を示すということは、単に優れた施設をつくるということばかりではなく、今後の山形県の景観形成を担う技術者の育成のためにも大きな意味を有するものである。

「山形県県土景観ガイドプラン」における県土景観の目標像

目標像①：山河の構造

－月山、鳥海山等の山岳と最上川の映える景観

目標像②：都市と農村の景観秩序

－市街地、田園、樹林地の三重構造のつくりだす階層性が感じられる景観

目標像③：もてなしの作法美

－県の玄関口にふさわしい装いの景観

「山形県公共事業等景観形成指針」における山形ならではの景観形成の基本

①県土に可能な限り傷をつけない

②県土の景観をより印象深く実感できるようにする

③安易な名物づくり・装飾をやめる

(2) 作成目的

県が主体となって実施する公共施設の整備や公共事業の実施にあたっての、色彩設計の考え方をわかりやすく解説することを目的とする。

(3) 利用想定

担当技術者（行政、計画設計事務所等）が、公共施設の色彩設計にあたって、内部検討用、業務指示、成果品チェック等の際に参照、利用することを想定する。

I 編：山形県の色彩の現状

我々のまわりの環境は、土や水、草木などの自然物と我々がさまざまな営みの中で築いてきた人工物とによって構成されている。元来、自然物のみの環境に人間が人工物を構築することで、暮らしを安全に、豊かに、そして快適にしてきた結果が現在の環境の姿であり、景観である。

1. 自然豊かな県土の色彩

山々の樹林の色彩

山形県は、県土の約70%に森林が広がる自然豊かな環境を有している。また、県内の多くの都市や集落等の町々は、山々に囲まれた盆地や山間に立地している。こうした地形的特徴により、各地域の町々から常に山並みが意識され、人工構造物は、これらの樹林や山並みと一緒に眺められる機会が多いこととなる。

「山形県県土景観ガイドプラン」においても、樹林地は、目標像②「市街地、田園、樹林地の三重構造のつくりだす階層性が感じられる景観」として、重要な景観構成要素とされている。

山々の樹木は何百年というオーダーでの普遍的な色彩を有しており、山形県の色彩を考えるうえでの基調となる要素である。

田園や樹園地等の色彩

山々の麓に広がる水田や樹園地もまた、町々から山並みを眺める際の前景となり、山形県の景観を特徴づけている要素である。生産の場であるこれらの耕作地は、自然と人間の営為とが調和した、半自然的な環境である。稲穂や果樹等による耕作地は、ある一定の広がりを持ち、背後の山並みとともに眺められることでより一層自然豊かな印象を与える。

こうした環境において、面的に広がりを持つ耕作地は、背後の山並みの樹林とともに、山形県の色彩を考えるうえでの基調となる要素として捉えられる。

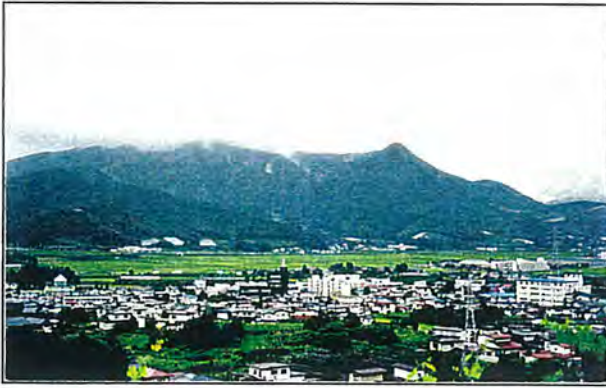
自然環境の季節的变化

自然の樹林は、季節的な変化を伴い、夏季の緑色だけではなく、新緑の淡い緑や、秋の紅葉、落葉後の枝の色等、多様な表情を見せる。また、田園においても、稲穂が出揃う時期や実り時期、刈り取り後の土が露出する時期等、1年間で様々な表情を見せる。

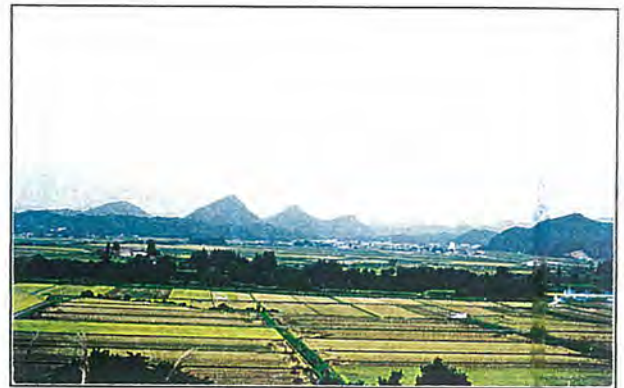
環境色彩を考える際には、こうした季節による自然物の色彩の変化があることに留意しておく必要がある。

季節による色彩の変化は、自然の景観を記述する上で欠くことができないものであるが、新緑や紅葉は一年のごく限られた期間のものである。これらはいずれもその移ろう色彩が美しいのであり、施設の色設計の際の規範としては適当ではない。

一方、山形県の場合、地方の差異は大きいものの、冬季の比較的長期間にわたり大地が雪に覆われる。そのため、冬季にのみ機能を発揮する雪対策施設が存在する。これらの施設については、背景としての雪の存在を考慮した色設計を行うこともあり得る。



市街地、田園、樹林地のそれぞれが美しく整えられ、さらに、相互の関係が良好に保たれることにより、三重構造が作りだす階層性が感じられるようになる。(山形市)



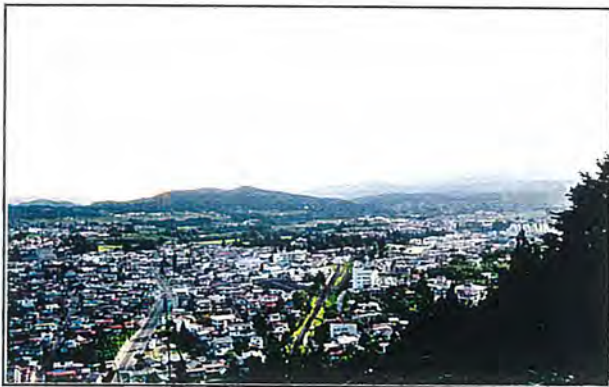
人々の営為により形成される田園は、河川や山並みと調和する、半自然的な環境である。伸びやかな田園は背後の山並みの前景となり、山々の姿をより印象的に見せる。(金山町)



樹園地は山形県を特徴づける景観要素である。開花した果樹を前景とする、雪を冠した山々への眺めは、地域を実感する印象的な風景である。(寒河江市)



夏は緑豊かな印象の田園や山々の樹林も、冬、積雪時には色味が感じられなくなり、ほとんど無彩色となる。季節による色彩の変化は、色相によるものである。(飯豊町)



山々は麓の田園とともに市街地を取り囲んでいる。こうした地形ゆえに、ある程度集積のある市街地でも、街並みの背後に近接する山々への眺めが意識されることとなる。(大江町)



都市内部からも、外部の山並みが眺められる。都市部の景観形成にあたっては、街並みとしてのまとまりとともに、その背後に見え隠れする山並みとの調和への配慮が必要である。(山形市)



タイルやパネル等の建材による街並みの色彩。こうした街並みは、色彩のみでコントロールすることは困難である。地域の景観計画等として、規模や形態とともに、総合的に計画することが重要である。(山形市)



金山伝統の建築様式を伝える蔵。風雪により変化した木材のこげ茶と、漆喰壁の白とのコントラストが美しい。これは、その色を選んだのではなく、地元産の木材や漆喰等の素材を用いた結果現われた色彩である。(金山町)



地域の伝統的な素材を用いて建築された住宅。新建材や塗装によって地域の素材の色を再現するのではなく、地域に伝統的に使われてきた素材を用いることが、地域の色彩の表現につながる。(金山町)

Ⅱ編：公共施設色彩設計の基本原則

公共施設の色彩設計にあたっては、景観形成の観点にたち、以下に示す3項目を色彩を考えるうえでの基本原則とする。

原則1 施設設計の一環として色彩を考える

原則2 素材の特性を踏まえて色彩を考える

- (1) 着色せずに素材色を活かす
- (2) 素材の保護や表情を与えるために着色を行う

原則3 周辺環境と施設の関係性から色彩を考える

- (1) 施設の規模、基本形態、出現形態と周辺環境との関係を考える
- (2) 周辺環境と施設の関係について考える

原則1 施設設計の一環として色彩を考える

施設設計においては、施設が置かれる場の景観や環境を考慮しながら、必要とされる機能を実現するための構造や形態、規模、素材の検討を進めていくことが基本であり、これが色彩の検討に優先する。

○色彩を選定するのではなく、施設のあるべき姿を考える

施設の色を検討するにあたっては、施設は色彩単独で成立するものではなく、色彩設計にはその役割と限界があることをまず認識する必要がある。色彩優先の考え方は、施設や空間のより良い形に関する真摯な検討の意味や重要性を捨象してしまう危険性さえも有しているといえる。

大切なことは、「どんな色にするか」ではなく、施設が置かれる周辺景観の状況を踏まえ、その対象・施設を「どのようにするか（どうあるべきか）」を考えることである。

○施設の機能を表す施設外観

奇抜な商業建築等を除けば、建築物の外観には、一般に当該建築物の機能が求める形態が表れ、その姿によって通常人々はその建築物が住宅であるか、体育館であるか、業務ビルであるか等の用途を知ることとなる。これは、土木の構造物にも当てはまる事項である。

施設設計にあたっては、その施設に求められる機能がどのようなものであるか、また、それが施設の形態としてどのような姿となって表れるべきかを十分に検討する必要がある。

○施設の要素や形態と密接に結びつく色彩

土木構造物をはじめとする公共施設は、複数の要素（部位や素材）の組み合わせにより構成されている。施設の色設計にあたっては、その対象となる要素が、施設のどういう部分であるか、また、どのような機能を果たす部分であるかについて考える必要がある。

建築の場合、デザインの基本的なコンセプト、窓やベランダ等といった当該建築物に必要な要素の配置、形態等と脈絡が感じられる配色が求められる。たとえば、窓の配置によって了解される階層の違いなどを、横帯状のアクセントカラーによってより明瞭に示すなど、これらの要素と配色との関係に存在必然性が感じ取れることが重要なのである。

色彩は施設の形態と深い関係があり、それと無関係な配色や装飾は、謹まなければならない行為である。

2. 都市環境の中の色彩

背後の山並みが意識される山形県の都市環境

山形県の都市環境の特徴は、その立地特性のために都市部であっても周囲を取り囲む山々が意識されることにある。したがって、都市部の色彩を考える場合にも、街並みの背後に見え隠れする山々の樹林を色彩要素として留意しておくことが必要である。

建材による都市部の色彩

都市内部においては、土地利用やその都市の規模により、立ち並ぶ施設や建築物の形態や規模、またはそれらの密度が異なり、その街並みが有する色彩もまた、その場その場で異なっている。

近年、統一感のある街並み形成の観点から、現在の街並みの建築物の測色を行い、施設の色彩設計の際にそれらと同様の色彩を用いる試みもなされている。しかし、現在の街並み景観にトータリティがあるとは言えず、色彩もかなりの混乱状況にある状況下において、このような方法に基づく色彩決定は、求めるべき範を誤った行為としての一面も有している。

本来的には、地区別まちづくり計画の一環として、景観形成の観点から建築物の色彩コントロールを行うことが適当である。

3. 地域・地区に特徴的な色彩

地域ならではの色彩は素材色

歴史的な街並みや伝統的な街並みがまとまって見えるのは、地域の素材を用い、地域の気候条件に合わせた建築様式により統一されているためである。

例えば、金山町の金山住宅は、地元名産の杉と漆喰の壁を組み合わせることにより表れる色彩である。これら特徴的な色彩は、地域で産出された素材が経年変化を受けていることが多い。したがって、塗装でその色彩を再現しようとしても不自然なものとなりがちである。

つまり、特定の地域に見られる特徴的な色彩は、地場産の木材や、土等の、素材の色である。

こうした色彩的特徴を有する地区の景観形成については、各地域・地区毎に、街並み全体としてトータルに計画し、地域の素材や伝統的な手法によりコントロールすることが望まれる。



体育館を含む運動公園的施設

山すその奥まった場所に配置して、国道などの視点からあまり目立たないように配慮している。また、体育館の屋根形状を工夫し、彩度の低い色を選択することで、背後の山並みとの関係を良好なものとしている。（最上町）



市街地に設置された地下道入口

薄い板状の屋根や細い柱を用い、軽快な印象の施設としている。透過性の高い形状による採光と、人を迎え入れるような屋根形状により、進入抵抗感を和らげている。また、無彩色の塗装により、ビルの立ち並ぶ人工的な都市部の景観になじませている。（高知市）



河川排水施設の門柱と上屋

通常は門柱側面に設置される階段施設を内部に取り込んでいる。さらに、門柱と上屋とを一体的にデザインしている。また、上屋の開口部を大きく取ることにより、親しみやすい表情を与えると同時に、窓枠を彩度の低い色彩として、落ちついた印象としている。（三郷市）

原則2 素材の特性を踏まえて色彩を考える

施設設計のプロセスにおいては、施設に求められる機能に基づいて、形態や素材の決定が色彩の選定に優先する。特に、素材は着色の方法に直接関わるため、色彩設計にあたっては、用いる素材の特性を踏まえる必要がある。

一般に、色彩設計というと、「どんな色をつけるか」ということと思われがちである。しかし実際には、使用する素材の特性によって、色彩設計の考え方は2つの考え方に分けられる。

(1) 着色せずに素材色を活かす

色彩設計の第1の考え方は、「着色せずに素材色を活かす」ことである。

たとえば、ダムやコンクリート製の橋脚などの構造物は、その構造物の素材であるコンクリート等を保護する目的から、その表面に塗装する必要性はない。また、橋梁の桁に用いられることのある耐候性鋼材なども同様である。この場合、施設設計としての素材の選択が、同時に色彩の決定に結びついている。（例えば、コンクリートならグレー）

コンクリートの橋梁桁や木製の手すりに装飾を目的として着色することは、まま見られる事である。しかし、塗装の必要性のない対象に無理に着色することは、いたずらに初期コストがかかるだけでなく、維持管理の一環として塗り直しが行われなければ、褪色や汚れ等により、かえってみすぼらしいものとなる恐れすらあることから、基本的に行わないことが良い。

土木構造物等の公共施設で、着色せずに素材色を活かすべきものには、コンクリート、耐候性鋼材、および、石・木等の自然素材があげられる。

○素材色を活かす色彩設計の方法

着色せずに素材色を活かす場合、素材の選択が色彩設計と必ずしも同義ではないことに注意する必要がある。自由度は低いながらも色彩に対する配慮が必要だからである。この場合の色彩とは、施設の色として認識される、見えとしての色のことである。

<コンクリート>

- ・コンクリートそのものが有している色彩は、グレー系の無彩色である。この色彩は、光のあたり方や陰影により明度に変化し、白に近いライトグレーから黒に近いダークグレーまでの幅がある。
- ・ダムや擁壁等のように面積が大きいコンクリート構造物で、その表面に表情を与えようとする場合、面の分割や各種の表面処理方法によって、陰影を与える、輝度を下げるといった考え方が色彩設計となる。具体的な手法としては、リブやスリット等により凹凸を与える、はつり仕上げや洗出しを行うといった方法があげられる。

<耐候性鋼材>

- ・風雨や太陽光等の気象作用による錆の付着や劣化を抑えるため、リンや銅等を添加したスチール。発生する錆は密着性が強く、安定した色となるため、無塗装でも用いることができる素材である。

<石材>

- ・石材を使用する場合には、色味に配慮しながら石材の種類を選択し、実際に使用する状態を想定して、石材各個の大きさや表面の加工方法等も同時に検討することが基本となる。

<木材>

- ・木材は、年月とともに腐食する素材である。そのため、防腐処理、焼付仕上げ等が施されることもある。木材を屋外に使用する場合、特に経年変化による劣化等が進みやすく、色彩も木材が有していたベージュ系からグレー系に変化していく。こうした腐食や変化を遅延させるために、防腐塗装が行なわれるが、木材が持つ風合いや色味を活かすためには、最小限の処理に留めるべきである。また、この考えに基づけば、木材の色彩を表現するためにコンクリート擬木を用いることは避けるべきである。



コンクリート製高架橋の橋台。面の分割により一様な面に変化を与え、さらに、はつり仕上げとすることで輝度を下げている。（福島市）



地域の歴史を描き込んだ法面保護工。周囲の樹林から際立ち、街並みの佇まいからも浮き立っている。このような場所では、壁面自体を目立たなくする工夫が求められる。



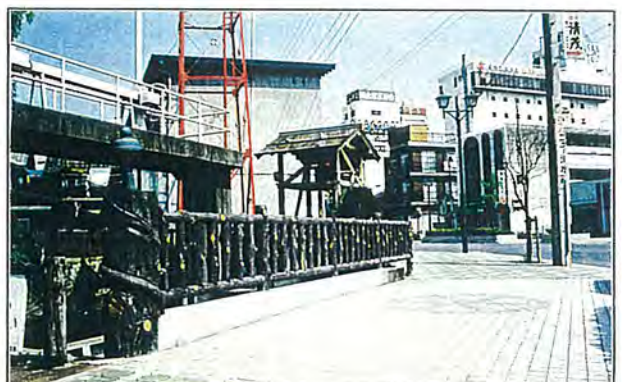
城下町の河川に設置された護岸。既存の鐘撞き堂を保全するため河道を緩やかに屈曲させている。護岸の石積みの方法は近接する城址の石垣を範としており、地区全体としての落ち着いた佇まいを演出している。（横手市）



石材の現場合わせの様子。各個の大きさ、表面の加工法、色味、素材の持つ味わい等を十分に考慮しながら、現場合わせを行い、使用する石材を確認する。



設置されたばかりの木製のフェンスは、木材そのままのベージュ系の色が表出している。しかし、風雪にさらされることにより褪色し、徐々にグレー系となっていく。木材を用いる場合には、その素材色の変化も考慮に入れ、選択、処理することが必要である。（酒田市）



コンクリート擬木を用いた橋梁高欄。コンクリートを用いて木を模倣し、さらに着色を行っている。コンクリートが持つ素材本来の良さを殺してしまっているうえ、木材の代替品としても不自然な印象は払拭できない。

(2) 素材の保護や表情を与えるために着色を行う

○着色の方法

施設の着色には、大きく分けて2つの方法がある。ひとつは塗装であり、もうひとつはパネルやタイル等の外装材の使用である。

○塗装による場合

塗装の目的には、大きく分けて、耐性強化（耐潮、耐候等）と、着彩そのもの（表情の付与）を目的としたものの2つがある。

耐性強化は、塗装の本来的な機能であり、スチール等の場合には防蝕等のために、一般には何らかの塗装が施される。しかし、塗装の本来的目的が耐性強化だからといって、どんな色を選択しても良いというわけではなく、景観形成の観点から周辺環境と施設との関係性から適切な色彩を選定する必要がある。

一方、着彩そのものを塗装の目的とする場合、色彩は施設の存在を示すための手段として用いられる。しかし、通常の土木施設をはじめとする公共施設の場合、このようにその存在をことさら示す必要性はほとんどない。「山形県公共事業等景観形成指針」でも記述しているように、大きな擁壁に地域の名物をペイントするといった例は、謹むべき行為である。

○パネルやタイル等の外装材を用いる場合

パネルやタイル等の外装材の使用は、建築物等で通常行われる行為である。この場合には、その施設がどのような目的の施設であるか、どのような環境の中に設置されるのか、どのような施設形態であるかなどを総合的に考えて、使用材料を選択することとなるが、色の選択は設計行為の最終段階であることを忘れてはならない。

○色の見本のみで色彩選定を行わない

着色の色彩選定の検討にあたっては、塗装であれば「塗料用標準色見本帳」をはじめとした塗料メーカーの色見本や、外装材であればメーカーのカタログ等を参照するが、ここで注意しなければならないのは、これらの色見本やカタログ見本で見る色彩と実際の施設に施される色彩とには、大きな違いがあることである。

色見本やカタログ見本を参照するとき、屋内で室内照明のもとで見ると、施設が設置される屋外で、自然光のもとで見るとでは大きな差が生じる。色見本やカタログ見本のみで安易に色彩選定をせず、実際に施工された状態を想定しつつ色彩の検討を進めることが必要である。

特に塗装による場合には、色見本は紙に印刷されたチップであることが多いため注意が必要である。実際に施工される塗装は、塗装面の光沢や下地の材質感も加わること、さらには面積的にも大きいことから、色見本とは見え方が異なる。

また、同じ塗装色であっても、テラコッタや吹き付け等の塗料の塗布の方法の違いにより、光の反射率や陰影等が変化し、異なる色彩として認識されることにも留意する必要がある。



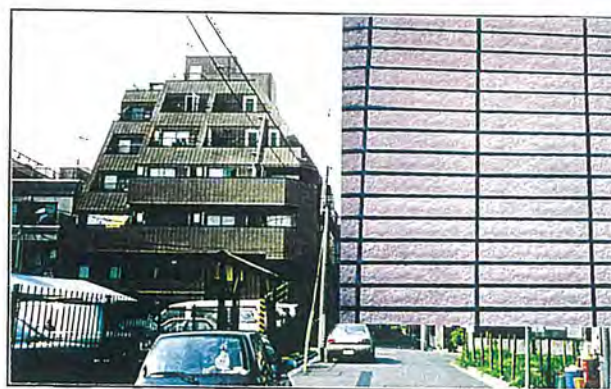
海岸沿いの道路に設置された防護柵。透過性の高いガードパイプ型とし、さらに低明度・低彩度の塗装を施すことにより、周辺環境に溶け込むように配慮されている。夜間の視線誘導については、支柱に反射テープを貼ることで対応している。
(いわき市)



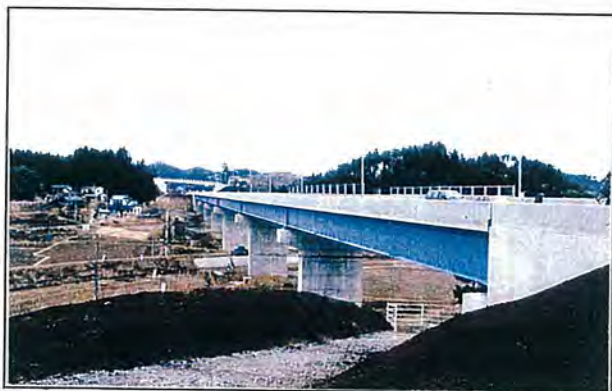
防護柵に地域の特産品であるミカンをイメージして黄色の塗装を行っている。しかし、周辺の樹木と全く異なる色相の彩度の高い色であるため、周辺環境から際立ってしまっている。



外壁にパネルを用いた建物。窓枠の大きさに合わせたパネルを用い、施設の形状と関連性が感じられる配色を行っている。また、同色相の明度が異なるパネルを部分的に用いることで、壁面全体の統一感を損なうことなく、適度な表情を与えている。
(札幌市)



同じ素材を用いる場合でも、面積が大きくなれば、その色の印象はより強くなり、また眺める位置が離れば、素材個々の表情よりもそれらが集合した面として認識される。素材の選択にあたっては、カタログや製品見本のみによらず、その素材が実際に用いられる規模や状況を十分考慮する必要がある。



橋梁ではあまり見かけない藤色の塗装を施した鋼製橋。色見本で見た場合にはきれいであると感じる色でも、構造物に用いられ、風景の中に置かれると印象が全く異なることがままある。塗装色の選択にあたっては、橋梁全体と桁とのバランスや、周辺環境との関係に十分留意する必要がある。

原則3 周辺環境と施設の関係性から色彩を考える

対象となる施設を「どのようにするか（どうあるべきか）」を考えるにあたっては、周辺環境との関係から考えることが極めて大切となる。

(1) 施設の規模、基本形態、出現形態と周辺環境との関係を考える

○施設の規模と周辺環境

施設の規模と周辺環境との関係は、景観形成を行ううえで極めて重要な観点である。たとえば、市街地では周辺に溶け込む建物も、水平性が卓越する田園地帯では小規模であっても極めて目立つ存在となる。また、主要な視点からの眺めにおいて、背後の山並みのスカイラインを切るか否かも配置、規模、周辺環境の関係性によっている。これらは、いずれも色彩の検討以前の問題であるが、景観形成上欠くことができない事項である。

さらに、同じ色彩を用いても、着色する面積の大小と背景となる景観との関係からも、施設の印象は大きく異なることに十分留意する必要がある。

このように、施設規模と周辺環境との関係は、景観形成を行う上で十分に留意する必要がある基本事項である。

○施設の基本形態と周辺環境

公共施設の中には、ダムや橋梁のように一定の基本形式がある施設と、護岸や擁壁のように必ずしも一定の形式が定まっていない施設がある。いずれの施設においても、求められる機能の実現は必要条件であるが、景観の一要素としてそれらが眺められる以上、周辺環境と無関係に基本形式や全体形状の検討を行うことはできない。

基本は、施設の形状や色彩が周辺環境と良好な関係を保てるかにある。そのために、施設の形状の洗練や表情の創出等、施設自体の質的向上を図ることが不可欠である。

○施設の出現形態と周辺環境

施設と周辺環境との関係を考えるにあたっての重要な点のひとつは、施設が「景観の中でどのような形態となって現われるか」ということである。

建築や信号柱等のように点的（群）に現れる施設、防護柵等のように線的（帯状）に現れる施設、また、宅地開発のような面的な事業といったように、それぞれの施設の景観への現れ方により、周辺景観との関係についての考え方が異なってくる。

これらは、無論、施設規模や施設的基本的形態と不可分な関係にあるが、施設と周辺環境との関係を良好に保つうえで配慮し、検討すべき基本事項である。

(2) 周辺環境と施設の関係について考える

周辺環境と施設の関係を抑える場合の基本的考え方は、「環境に埋没させる」「環境に溶け込ませる」「環境から際立たせる」の3つに集約される。

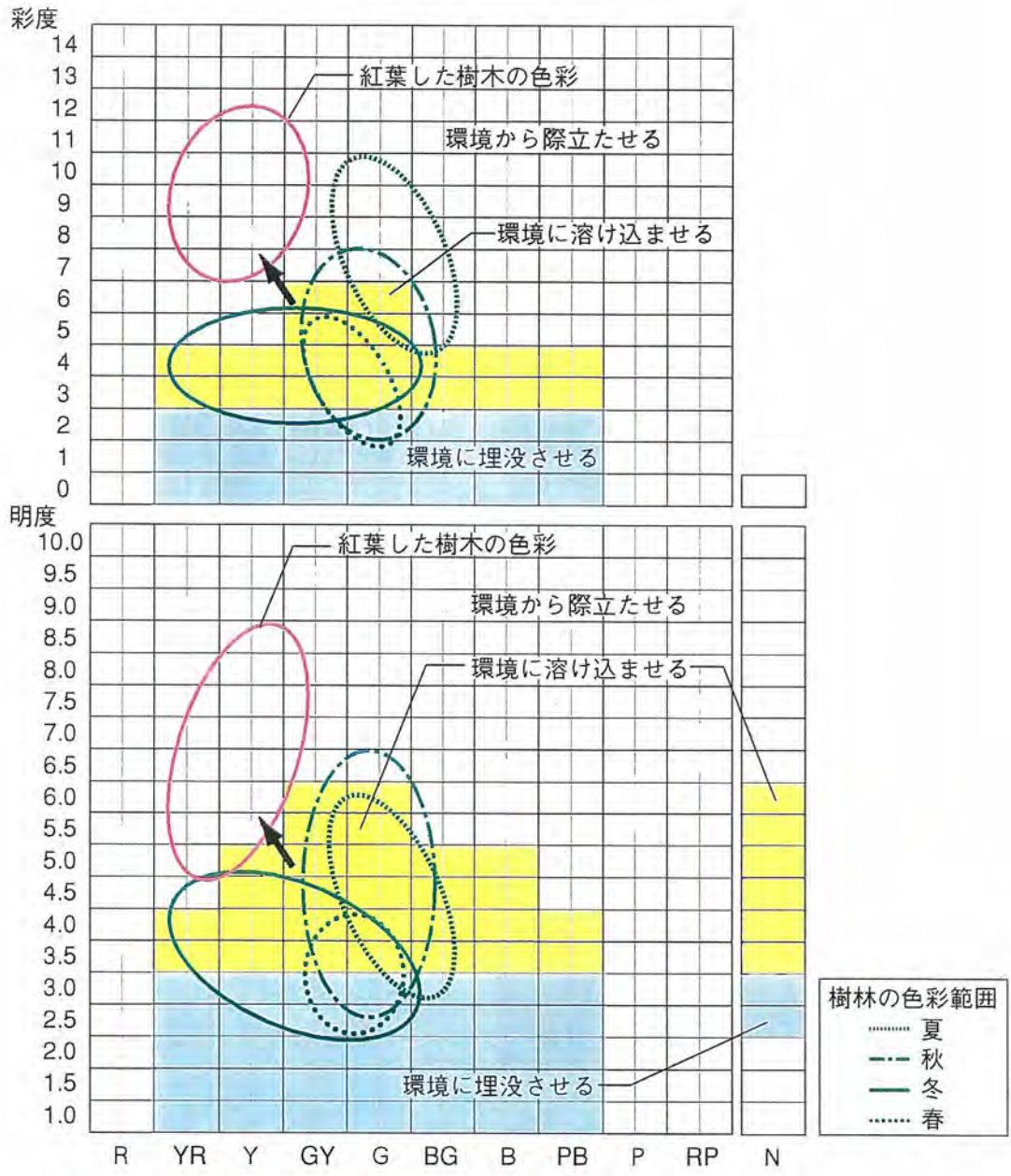
「環境に埋没させる」とは、基調となっている周辺の環境色よりも低明度・低彩度の色彩を用いて、対象となる施設を目立たせず、そこに存在することを意識させないようにする考え方である。

「環境に溶け込ませる」とは、基調となっている周辺の環境色と同系、もしくは類似の色彩を用い、対象となる施設もその中の一部として溶け込ませ、景観をつくりあげる考え方である。

「環境から際立たせる」とは、基調となっている周辺の環境色とは対比的な色彩を用いて、対象となる施設を周辺から際立たせる考え方である。

樹林の一般的な色彩分布を例にとり、以上の3つの考え方を模式的に表すと次図のようになる。また、この図をもとに読み取れる「環境に埋没させる」「環境に溶け込ませる」「環境から際立たせる」に該当するトーンは、別表の通りである。

なお、色彩の3属性（色相・明度・彩度）、および、トーンを踏まえた色彩調和の考え方については、参考資料の「1. 色彩の基本」を参照されたい。



■周辺環境（樹林）と施設の関係

■周辺環境との関係により選択されるトーン

周辺環境との関係	該当するトーン
環境から際立たせる	pale (ペール)、light (ライト)、bright (ブライツ) strong (ストロング)、vivid (ビビッド)、deep (ディープ)
	light grayish (ライトグレイッシュ)、dull (ダル) soft (ソフト)、LIGHT GRAY (ライトグレイ) ※色相によって「際立たせる」もしくは「溶け込ませる」に含まれるトーン
環境に溶け込ませる	grayish (グレイッシュ)、GRAY (グレイ)
	dark (ダーク)、grayish (グレイッシュ) ※色相によって「溶け込ませる」もしくは「埋没させる」に含まれるトーン
環境に埋没させる	dark grayish (ダークグレイッシュ)、DARK GRAY (ダークグレイ)

<環境に埋没している例>



橋桁に周辺の樹林より明度の低いグリーン系の色を用い、さらに、橋脚のコンクリートが経年変化により低明度となっているため、橋梁全体が周辺環境の中で目立たない存在となっている。
(秋田県 生保内川)

<環境に溶け込んでいる例>



橋長の長い橋であるが、細い鋼材を用い、周辺の土等と類似した彩度の低いベージュ系の塗装を施すことにより、軽快な印象を与えている。また、橋脚の石材は経年変化により褪色し、低彩度となっている。こうした形態や色彩により、山間の河川景観において目立ちすぎず、風景の一要素として溶け込んでいる。
(福島県山都町 一の戸鉄橋)

<環境から際立っている例>



平地部の河川に架かる橋梁は、河川空間に広がりがあり、あらゆる場所から眺められやすい。構造上は大きな特徴のない、一般的な連続単純桁橋であるが、橋桁に彩度の高いピンク系の塗装を行っているため、非常に目立つ存在となっている。これが、環境から際立つ状態である。

周辺環境と施設との関係性から色彩を考えるにあたっては、施設の設置場所がどのような環境を有しているか、また、施設がどうあるべきかによって、以上の3つの考え方のどれかを選び、方向づけることが望ましい。

○自然樹林が環境の主体となる場所で、施設が目立つ必要がない場合は、
環境に埋没させることを基本とする

山々や河川等、自然豊かな環境が景観の主役となる場所においては、その優れた自然景観をより印象的に眺められるよう配慮する必要がある。この場合、環境の主体となるのは樹林である。

したがって、こうした環境に設置される施設は、その機能上目立たせる必要がなければ、対象となる施設を目立たせず、そこに存在することを意識させないよう、環境に埋没させることが基本となる。

○自然樹林が環境の主体となる場所で、施設を認知させる必要がある場合には、
環境に溶け込ませることを基本とする

自然の樹林が主体となる場所であっても、施設に求められる機能や役割によっては、その環境のなかで施設を認知させることが必要な場合がある。

こうした場合でも、景観の主体はあくまでも樹林を中心とした自然環境であるため、施設を必要以上に目立たせることは、避けるべきである。したがって、施設を認知させる必要がある場合には、環境に溶け込ませることが基本となる。

○田園環境においては、環境に溶け込ませるか、または埋没させることを基本とする

水田や樹園地等の田園環境において特徴的なのは、平面的に広がりのある田園が前景となって、背後の山並みを引き立てていることである。水平性が卓越する田園においては、そこに存在する集落も含めた様々な施設群が認識されやすい。

こうした環境に立地する施設は、背景となる山並みとともに、田園環境の中の一要素としておさめることが重要である。これは、色彩のみで対処できることではなく、施設の配置や規模や高さ等の工夫によるところが大きい。

したがって、色彩についてもこの考え方にに基づき、田園や背後の山並みの樹林から突出することのないよう、「溶け込ませる」か「埋没させる」かのどちらかを、選択することを基本とする。

○施設が連担する都市部や集落等では、周辺の環境に溶け込ませることを基本とする

都市部や集落内では、建築物等が連担して街並みを形成している。こうした環境に施設を設置する場合には、既存の街並みとの関係に配慮する必要がある。

このとき、対象施設を既存の街並みの一部として溶け込ませ、景観をつくりあげることが基本となる。この考え方に基づいた色彩設計の方向性としては、基調となっている周辺の環境色と類似の色彩を用いることが有効である。

○歴史的・伝統的な街並みを有する地域では、

地域の素材を用いて既存の街並みに溶け込ませることを基本とする。

都市や集落の中でも、旧集落や城下町等の歴史的・伝統的な街並みを有する地区では、その街並みの雰囲気や佇まいを保つことが重視される。こうした街並みの色彩は、地域で産出された素材の色であり、地域に受け継がれてきた伝統に基づく色彩である。したがって、こうした環境に施設を設置する場合は、できるかぎり地域の素材を用いて、既存の街並みとの調和を図ることを基本とする。

○環境から際立たせる色使いは十二分に考慮し、限定的に用いることを基本とする

施設の機能上、目立たせる必要のある場合には、周辺の色とは対比的な色彩を用いることも考えられる。この環境から際立たせる考え方を適用する場合には、施設の一部へのアクセントとしての使用、あるいは、施設自体に求められる機能を満たすための色彩等、限定的に用いることを基本とする。

また、この考え方により色彩を選択する場合、使用する色彩について十二分に考慮し、必要以上に施設が周辺環境から浮き立たないように配慮することが必要である。



橋桁やアーチ等に細い部材を用い、彩度の低いグレー系の色を選択することにより、自然環境での橋梁の存在感を弱め、周辺の樹林地や山肌に埋没させている。



自然的な公園内の宿泊施設。樹林に埋もれるように施設を配置し、主素材として木材を用いているため、周囲の樹林に溶け込んでいる。
(苫小牧市)



背後の丘陵地、山並みとの高さのバランスがとれた施設。背後の丘陵地に近接させて施設を設置しているため、遠方からの眺めにおいて、スカイラインが保たれている。水平性が卓越する田園に施設を設置する場合は、目立ち過ぎることがないように、まず設置位置や施設の高さ等に配慮することが重要である。(最上町)



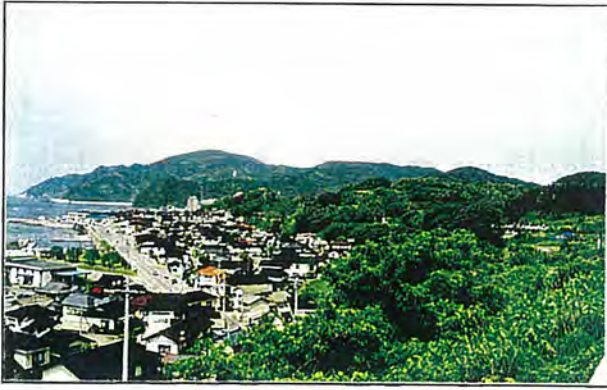
施設規模が大きいうえに、背後の山並みとの明度差が極めて大きいため、田園から際立つ施設。施設の配置や形態を工夫しながら、背後の樹林や田園等の周辺環境を踏まえて色彩設計を行うことが必要である。(山形市)



外壁にブルー系のタイルを用いた建築物。周辺の建築物が低彩度の色を用いている中で、全く異なる色相の彩度の高い色を用いているため、建築物の高さが低いにも関わらず、街並みから浮き立っている。施設が連担する都市部においては、建築高等と共に街並み全体のトータリティという視点から施設のあり方を考えることが必要である。



地域の建築様式に則って建物が建てられると、高さや外壁、屋根の色彩が統一され、街並みにまとまりが生まれる。集落内部においては、既存の街並みへの配慮と共に、その街並みの背後に見え隠れする周辺の山並みの樹林との関係にも留意する必要がある。(立川町)



地域において伝統的に使われてきた黒瓦を用いることにより、まとまりのある街並み景観が保たれる。(鶴岡市 由良港)



橋桁や橋脚にはコンクリートを用い、高欄部分には彩度が低いグレー系の色が用いられている。橋桁の下部の塗装が必要なスチール部材は、施設に占める割合が低く、外部からは目立たないため、彩度の高いブルー系の色を用いてアクセントとしている。



道路を横断するオーバブリッジ。橋桁やトラス、フェンスの部材を細くすることで、透過性が高まり、橋梁の軽快なイメージを演出している。トラス部分に、彩度の高いレッド系の色を用いているが、明度を抑えているため、周辺の緑地から浮き立ち過ぎず、景観の中で適度なアクセントとなっている。



街区公園内の入口部に設置されたゲート。柱にコンクリートを用い、屋根に彩度、明度の高い色を選択している。周辺街区の街並みとしての統一感を妨げない程度に、主な利用主体である子供たちの意識を向けさせるような色づかいも考えられる。(仙台市)